

## 略 歴

### 児玉高慶 こだまこうけい 1888～1929

- 明治21年 柴平村小枝指の豪農児玉猪太郎・シノの長男として生まれた。
- 39年 講道館に入門、嘉納治五郎から柔道の教えを受け、更に有信館に入門して中山博道に剣道を学び、以後毎年上京して修業錬磨を重ねた。
- 大正元年 このころより武道奨励に力を入れ子弟の指導に当たった。また、各地の試合に出場して全国の武道家たちとの交流を深めた。
- 10年 大日本武徳会有功会員に列せられ、有功章を贈られた。
- 14年 宮内省剣道特別試合に出場、摂政宮殿下の御前において見事に優勝した。
- 15年 剣道5段、柔道5段。昭和4年急逝、享年41歳。没後柔道教士追授。

### 柴田春光 しばたしゅんこう 1901～1935

- 大正12年 中央美術展に「東北の或る町」が入選、「中央美術」の口絵に作品載る。
- 13年 「東北の或る町」と同じ構図で雪景色を描き、院展に入選した。
- 14年 「馬車待ち」が院展試作展に入選し、栄誉の院展賞を受けた。
- 15年 中央美術展に「雪すべり」が入選した。東京朝日新聞に連載の長編探偵小説「一寸法師」の挿絵を作者江戸川乱歩の推薦によって描いた。
- 昭和3年 帝展に「狭布の里」が入選。「みちのくの冬」(昭4)、「雪路の商い」(昭5)、「国上之草庵」(昭6)、「十和田路」(昭8)と次々に入選。
- 4年 春の帝展といわれる日本画会に「港の林檎売」が入選、同人に推薦された。

### 阿部六郎 あべろくろう 1893～1974

- 明治26年 当時の鹿角郡長、小田島由義・ハツの六男として、花輪町に生まれた。
- 大正5年 青山学院高等科卒業。7年阿部エツと結婚して阿部家に入った。
- 7年 静岡県立葦山中学校を皮切りに各地の学校で教鞭をとった。
- 昭和2年 カメナ・ソサエティを主宰。花輪で最初のレコードコンサートを自宅で開催。花輪町音楽同好会を設立し、第1回の演奏会を開催した。
- 21年 花輪高女校長から進駐車応対の秋田県知事の通訳として活躍、この年退職。
- 24年 鹿角合唱連盟創設。27年、公選町教育委員となった。
- 37年 恩徳寺に句碑建立。49年、「胡六句集」刊行。同年6月逝去、享年81才。

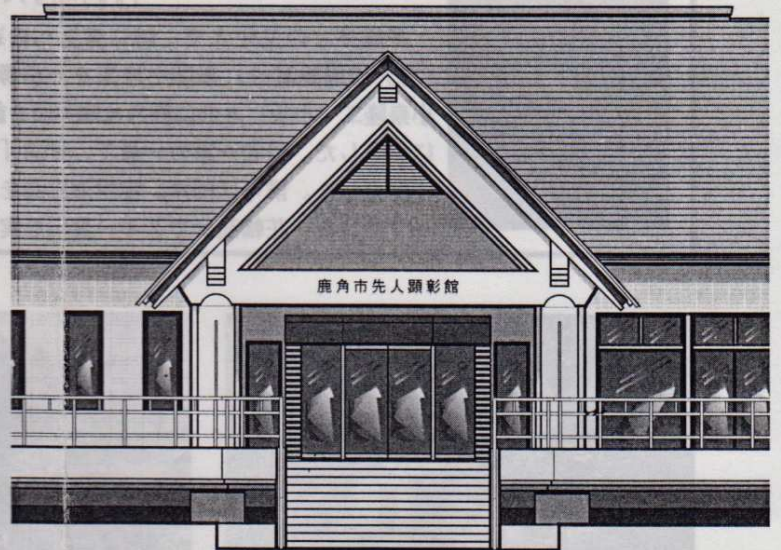


## 新しい文化を築いた人々…

### 先人顕彰シリーズ⑥

当先人顕彰館は、鹿角にゆかりの深い先人に関する資料の発掘収集、保存、事跡の調査研究と公開展示をいたしております。

世界的な東洋史学者「内藤湖南」、十和田湖の開発に尽力した「和井内貞行」の両氏をメインに常設展示し、さらに各界の先覚者を順次展示紹介してまいります。



鹿角市先人顕彰館 ☎ FAX 0186-35-5250  
〒018-53 秋田県鹿角市十和田毛馬内字柏崎3番地の2



### 児玉高慶

こだま こうけい  
1888~1929

### 武道を奨励し青少年を指導

広く近郷の人々に柔剣道を奨励、私費を投じて道場を経営し、指導に当たった。名声を慕って入門する者多く、門弟千二百名余、有段者は百数十名を数え、東北の一寒村も日本一の武道の村として、全国にその存在を知られるに至った。自らも錬磨を怠らず、大正14年宮内省剣道特別試合では摂政宮殿下の御前において勝ちをおさめ面目をほどこした。また、居村に対して深い愛情を持ち村人の慰安、時局講話、道路普請、農事改良等に力を尽くすなど多くの事跡を残している。情誼厚く、武道の精神ですべてに対処し、青少年教育に大きな成果をあげた。



### 柴田春光

しばたしゅんこう  
1901~1935

### 才能をうたわれた若き画家

明治34年、製菓業を営む伊惣太・ロク（月嶺門下の田中北嶺の娘）の長男として、毛馬内中町に生まれた。本名を良吉といい、感受性が強く、幼いころから絵の天分に恵まれた。大正8年画家を志して上京、日本美術学校に学び、はじめ佐藤紫雲の門に入り、良雲と号していたが、やがて川崎小虎の門下生となり号を春光と改め、大和絵の手法を学んだ。郷里毛馬内の生活風俗を好んで描き、郷里の生活を限りない愛情をもって表現した詩情豊かな作品をつぎつぎに発表した。昭和10年、才能を惜しまれながら33歳で病没した。



### 阿部六郎

あべろくろう  
1893~1974

### 郷土文化の向上に貢献

多趣多才の文化人で、特に音楽への造詣が深く兄樹人から作曲の手ほどきも受け、大館中学校（現大館鳳鳴高校）奉職中音楽をも指導し、多くの応援歌を作曲した。戦後、大里健治（毛馬内）、小泉隆二（小坂）と共に鹿角合唱連盟を創設。又、私費を投じて著名音楽家を招聘し、地域の情操教育に貢献した。俳句一家の一員で、俳誌「十和田」の同人。長兄艸子とともに花輪俳談会の指導・発展に尽力した。俳号は胡六。宝生流謡曲を嗜み、民謡の振興に尽力し日本一の唄手を生み、各種のスポーツを好み、花輪高女でスキー登山を実施した。



児玉道場



柴田春光筆「狭布の里」(昭3)



阿部胡六筆の色紙